”絵と自転車”と出会い、仕事人間がたった４年で劇的変化

大手建設会社営業部勤務の佐藤健人さん（53歳）は毎週末，愛車のロードバイク（道路競技用の軽量自転車）で自然の中をひた走る。ヒップバックの中にはスケッチブックと水彩絵の具。気になる風景に出くわすと，しばしのスケッチタイムに突入だ。

その様子から、かつての無趣味で出不精だった姿を想像するのは難しい。佐藤さんはいかにして趣味に目覚めたのだろうか。

趣味は ”家でじっとしていること!

2001年9月，上高地。まだ暗いうちに山小屋を出発した一行は、河童橋に着くと思い思いの場所に腰を下ろし、絵を描き始めた。彼らは，スケッチ教室を主宰する画家の岩本芳雄さんと生徒たち。その中に，４月から絵を習い始めたばかりの佐藤さんの姿があった。

澄み切った川と空気と穂高山―。スケッチブックに筆を走らせながら,佐藤さんは,「早起きをしてこんな自然の中で絵を描いている自分が信じられない･･･。半年前にはまったく想像できなかったな」と、同行の奥さんにしみじみ語りかけた。

何しろ、その少し前まで佐藤さんの辞書には“趣味を楽しむ”という言葉は存在しなかったのである。「仕事以外の、やらなくてもいい面倒なことは一切やらない主義。趣味は？ と聞かれれば ”家でじっとしていること„と胸を張って答えていたくらいですから」。

そんな様子に危機を感じたのは、当の本人よりも奥さんのほうだった。「このまま放っておいて，”ぬれ落ち葉„ のあげく，ボケたら困る。夫にはいつまでも元気で生き生きとしていてもらいたい」――。おそらく、そう考えたであろう奥さんは、夫に趣味を持たせるために一肌脱ぐことを決心する。

「何かやりたいことはないの？」。「うーん、何かって言ってもなあ…」。「何かあるでしょう。昔得意だったこととか」。「じゃあ･･･ 絵，でも描いてみるかな」。佐藤さんがそう答えたのは、小中学校時代に図工や美術が好きだったことを思い出した。ただそれだけの理由だった。だが、奥さんはさっそく行動を開始した。

「ある日女房が『いい先生をみつけたわよ。月一回だから通えるでしょう』と言うんです。新聞に載っていた個展に出かけ，先生と話をして、その場で教室に申し込んできたと。つまり，女房が全部お膳立てをして背中を押してくれたということですね」。

それが，岩本芳雄先生主宰のスケッチ教室「さいたまアートウェイスクール」との出会いである。多趣味で、夫の性格を熟知している奥さんの教室を選ぶ目は，さすがに確かだった。

「オバサンばっかりで、私なんか溶け込めないんじゃないか」と恐れをなす佐藤さんの心配は、まったくの取り越し苦労だった。10名の受講生のうち半数近くが同じ現役世代の男性だったということもあって話もしやすい。先生の人柄も教室の雰囲気も、佐藤さんの波長とぴったり合ったのだ。

「絵を描くという行為そのものが新鮮で単純に面白かったこともありますが、仲間と気楽な会話ができることが楽しくて。仕事以外に活動の場ができて、人間関係が広がったことが、私にとって大きな収穫でした」。

先生は、受講生ひとりひとりの個性を尊重する教え方で、型にはめたり押し付けたりすることは一切ない。受講生はそれぞれの感性を生かしながら、十人十色の絵を上達させていった。これも佐藤さんには好ましかった。

スケッチから自転車へ ー 繋がる楽しみ

まず、サインペンで輪郭を整え，水彩絵の具で濃淡を活かしながら色をつけていく。少しかすれて震えたような黒い輪郭線が、柔らかな色合いの温かみのある絵に，いい塩梅の強さと個性が味付けされる佐藤さんが描くのはそんな柔らかな印象の絵だ。

「こんなふうに描けるようになったのは習い始めて2年くらいたってからです。最初は何でも見た通りに描こうとして，まるで建築の設計図のような硬い絵を描いていました。『佐藤さんの線は定規で引いたようだ』,『瓦を一枚一枚数えているんじゃないの？』などと言われましたから」。

正確に描こうと思うと、肩に力が入って疲れてしまう。疲れながら描いた絵は、あまり面白くない。それに気がついた佐藤さんは力を抜き ペンの端を持って，それ自体の重みに任せて動かしてみた。すると，味のある面白い線が描けるようになったのだという。

2003年夏。もうひとつの大きな出会いが佐藤さんに訪れた

自転車，である。60歳過ぎから自転車を始めたというスケッチ仲間から,「世の中に自転車ほど面白いものはない、自転車はいいよ」と何度も聞かされるうちに，その気になったのだった。自転車との出会いは佐藤さんに「想像を超えた別世界を体験させてくれた」という。次回は、絵の世界をますます広げる自転車の魅力と、将来のビジョンをたっぷりお聞きしよう。

典型的な仕事人間だった佐藤健人さん（53歳・大手建設会社営業部勤務）が、奥さんの勧めで絵を習い始めて4年、仲間の誘いで自転車と出会って2年がたった。そのいきさつは、前回紹介した。

今回は、ふたつの趣味が佐藤さんを別人に変え，豊かで確かな定年後への設計図を描くまでになった様子を紹介する。佐藤さんにとって、もう定年はこわくない。

週末は自転車で、奥多摩や軽井沢へ

最初に買った自転車はマウンテンバイク。しかし，サイクリングロードで後ろから来たロードバイク（道路競技用の軽量自転車）に次々と追い越されるのが悔しくてたまらない。2004年8月，新しくロードバイクを買った。以来，佐藤さんの自転車熱は一気に過熱する。

「最初，自転車はあくまでもスケッチポイントからポイントへの移動手段だったんです。ところが，そのうち自転車で走ること自体が面白くてしょうがなくなりました。この時期から、楽しみの比重がスケッチよりも自転車の方が大きくなっていきましたね」。

雨が降らない限り、土日のどちらかは自転車で出かける。走る距離はだいたい往復60キロメートルから100キロメートル。自宅のある埼玉から、多摩湖,江戸川の土手，荒川の河口，熊谷の森林公園など、行き先はハンドルの向くまま、気の向くまま。走りながら「ここだ!」と直感すると、自転車を止め，ヒップバックからスケッチブックを取り出す。そして，おもむろに、ペンを走らせる。

「ときどき電車で奥多摩や軽井沢方面に遠出もします。自転車の両輪を外して持ち運び用の袋に入れれば、楽にかつげますから。今年の夏は青梅まで電車で行き、そこから自転車で峠を越えて名栗村から秩父，そして飯能へ下ってきました」。

こんなふうに、土日の過ごし方は以前とがらりと変わった。木曜日ころから週末の天気が気になってしょうがない，計画を立てる金曜日の夜から気分はすでに高揚しはじめる あまりの変わりように驚いているのは、奥さんよりも佐藤さん自身なのである。

自転車で30年ぶりによみがえる快感

“自転車効果”は，スケッチだけではなかった。以前は、体がだるいから家でごろごろする，よけいにだるくなる，ますます動かなくなる――そんな悪循環で佐藤さんは年がら年中疲れていた。カゼもひきやすく、胃の調子も悪かった。体全体の活力が落ちていたこともあっただろうし、何よりも自分の気持ちを湧き立たせてくれるものがなかった。

「今は本当に健康的になりました。自転車は確かにハードでしんどいのですが、爽快な疲れ，とでも言うのでしょうか。前のように嫌な疲れを翌週に残すことはなくなりました。食べるものはおいしいし、胃薬ももう必要ない。ダイエット効果も抜群で，3カ月間でウエストはマイナス5センチ。ベルトの穴がふたつ縮まりましたよ」。

それにしても、いったい自転車の何がこれほど佐藤さんを夢中にさせたのだろうか。

「大学時代にボート部で、体育会系クラブ特有の”自分の体を追い込む快感”のようなものをずいぶん経験しました。卒業後は運動から遠ざかっていたのですが，自転車で走ったときに，その快感が30年ぶりにありありと蘇ってきたんです。あー、これだ! と思いました。この感覚が私を自転車の虜にしたのではないでしょうか」。

さらに、自分の努力が100% 報われるのが自転車の最大の魅力だ，と佐藤さんは言う。頑張れば頑張っただけ、確実に先に進めるし、早くも走れる。苦しい上り坂もペダルを漕ぎ続けさえすれば，いつか必ず乗り越えられる。仕事ではなかなか味わいにくいそのストレートな達成感がたまらないのだと言う。スケッチは200枚ほどたまった。今年の2月に佐藤さんは自身のホームページ「スケッチギャラリー オンロード/オフロード」を立ち上げ，それらを公開している。

70歳までは自転車，その後は絵を中心に

「女房が強く背中を押してくれたおかげで，人生がこんなに豊かになった。女房には本当に感謝、感謝です。だから今度は私が誰かの背中を押してあげたい」。佐藤さんは会社の同僚に、「今のうちから趣味を見つけておいたほうがいい」と事あるごとに勧めている。

「何をやったらいいかわからない,という人がほとんどですね。でも 遊びなんですから難しく考えずに，とりあえずやってみて合わなかったらやめればいいくらいの気楽さでいいんじゃないでしょうか。とにかく一歩を踏み出さないことには何も始まらないわけですから」。

会社の定年は65歳。まだ10年以上先だが、佐藤さんの頭の中にはすでに定年後のビジョンが描かれている。実は、会社は60歳定年を最近65歳に延長した。それで，「将来の設計図も少々変更しなければなりませんでしたけどね」と笑う。

「70歳までは自転車を続ける。それを過ぎたら体は無理をせず絵を中心に、できるだけ長く描き続ける。そのうちに人に教えることができればいいし、個展も開きたいですね。2年後に長期の休暇が取れるので，女房とふたりでイタリアに行こうと思っています。どこを見ても絵になる国ですからね。

いろんな場所でスケッチをして，それからジロ・デ・イタリア（自転車レース）を走る選手の横で、少しだけでも並走できたら大満足。女房ですか?―オペラ鑑賞と買い物でしょう。夫婦それぞれの趣味を楽しんできますよ」。

佐藤さんの辞書から，“ぬれ落ち葉”の言葉は消えていた。